The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランス勤工倹学生の大波乱(上)
Author(s)	周, 恩来; 米原, 謙; 申, 春野
Citation	国際公共政策研究. 2000, 5(1), p. 355-373
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12521
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フランス勤工倹学生の大波乱（上）

Turbulence of the Diligent-Work and Frugal-Study Students in France (I)

周　恩来　　著
米原　　謙*/申　　春野**　共訳

Written by ZHOU Enlai
Translated by YONEHARA Ken and SHEN Chunye

Abstract

The Diligent-Work and Frugal-Study (*Qingong jianxue*) was a movement promoted by the Chinese anarchists in Paris, whose central figure was Li Shizeng. One can trace the origin of this movement back to the bean curd company established by Li in 1908. The movement was begun on a large scale in 1919 and ended in failure before long. Young Zhou Enlai, who had arrived in France in 1920 as one of the Diligent-Work and Frugal-Study students, reported the whole story in two articles appeared in the Chinese magazine. The article we translate here is the previous one, in which he tells the causes of difficulties of his colleagues.

キーワード：周恩来、李石曾、蔡元培、勤工倹学、アナキズム

Keywords：Zhou Enlai, Li Shizeng, Cai Yuanpei, Diligent-Work and Frugal-Study, Anarchism

* 大阪大学大学院国際公共政策研究科 教授
**大阪大学大学院国際公共政策研究科 博士前期課程

【訳者解説】

「勤工倹学」とは「労働に励み、倹約して勉強する」という意味である。第一次世界大戦末期から1920年前後の中国では、一時期、勤工倹学する若者をフランスに送り出す運動が盛んに行われた。この運動でフランスに留学した青年たちが1922年に中国共産党旅欧支部を結成し、中国の社会主義運動に大きな影響を与えることになったことはよく知られている。周恩来、鄧小平などの後の共産党指導者はいずれもこの運動によってフランスに行った経験者である。毛沢東も、自身はフランス留学をしなかったが、中国側で留学生送り出しの運動にたずさわっている。

フランス勤工倹学運動については『赴法勤工倹学運動史料』（全3巻、清華大学中共党史教研組編、北京出版社、1979〜80年）が公刊されており、その全貌は収録された史料によってあらかた知ることができる[1]。第2冊（上）に掲載された一覧表によると、勤工倹学生の送り出しは17次に上り、それぞれの出発日と人数はつぎのとおりである。第1次（1919年3月17日、89人）、第2次（同3月31日、50人）、第3次（同7月13日、60余人／同8月14日、60余人）、第4次（同8月25日、50人）、第5次（同9月29日、40余人／同10月31日、150人）、第6次（不明）、第7次（不明）、第8次（同12月9日、158名）、第9次（同12月25日、50人）、第10次（1920年1月5日、60余人）、第11次（同4月1日、50人）、第12次（同5月9日、130人）、第13・14次（同5月19日、130余人／同6月25日、97人／同9月10日、83人）、第15次（同11月7日、197人）、第16次（不明）、第17次（同12月15日、140人）。約2年ほどの間に、判明している分を単純に合計しただけで1600人ほどが渡仏したことになる。なお本文の筆者周恩来が渡仏したのは第15次だった。

勤工倹学運動は、李石曾（1881－1973、名は煜瀛）が1908年に創立した豆腐製造会社に、中国人労働者を呼び寄せたのがそもそもの発端だった。その後、第1次世界大戦の勃発によって深刻な労働者不足になったフランス政府は、中国政府と協力して多数の中国人労働者を受け入れた。こうした事情を背景に、戦後、本格的に勤工倹学運動が開始されたのである。

1) なおフランス勤工倹学運動に関連する日本語文献として、以下のものがある。寺広映雄「留仏フランス勤工倹学運動について」（『歴史研究』第11号、1974年）、何長工『フランス勤工倹学の回想』（河田悌一、森時彦訳、岩波書店、1976年）、嵯峨隆・坂井洋史・玉川信明編訳『中国アナキズム運動の回想』（総和社、1992年）、嵯峨隆『近代中国アナキズムの研究』（研文出版、1994年）。またフランス側の資料を駆使し、中仏の外交関係も視野に入れながら、勤工倹学運動の過程を見事に描いたものとして以下の文献がある。Annie Kriegel, Aux origines françaises du communisme chinois, *Communismes au miroire français : Temps, cultures et sociétés en France devant le communisme*, Edition Gallimard, 1974. さらにこの時期の中国アナキズムを扱ったものとして以下の文献があり、これらの文献でも勤工倹学運動に関する記述がある。Peter Zarrow, *Anarchism and Chinese Political Culture*, Columbia University Press, 1990. Arif Dirlik, *Anarchism in the Chinese Revolution*, University of California Press, 1991. Ming K. Chan & Arif Dirlik, *Schools into Fields and Factories : Anarchists, the Guomindang, and the National Labor University in Shanghai, 1927-1932.*, Duke University Press, 1991.

中心人物の李石曾は清朝の高官を父とする名門の出で、1901年に渡仏した後アナキストとなった。1907年にかれが中心となってパリで創刊された中国語雑誌『新世紀』は、中国におけるアナキズム運動の濫觴のひとつとして知られる。「勤工倹学」も、本来、アナキズムの理念を実践しようとしたものだった。つまり単に「働きつつ学ぶ」というのではなく、肉体労働と精神労働の統一という意味が込められていたのである。しかしこの運動が開始されたのは、フランスがちょうど戦後不況に苦しむ時期と重なった。このため渡仏したものの就職ができず、生活難に陥るものが多数出現した。その結果、パリでこの運動の中心にいた李や、張継、呉稚暉、蔡元培らは、勤工倹学生たちの恨みを買うことになった。しかも中仏両政府の協力でリヨンに設立されたリヨン中仏大学も、かれらには門戸が閉ざされていることが判明して、勤工倹学生たちが中仏大学を占拠するという事態に発展した（1921年９月）。結局、この事件に関与した学生たちは強制送還になり、勤工倹学運動は悲劇的な最後を迎えることになる。

この運動で責任ある立場にあったのは、李石曾を始めとするアナキストだった。かれらは後に国民党に属して共産党と対立することになったため、勤工倹学運動の顚末は批判的に扱われることが多い。ここに訳出した周恩来「フランス勤工倹学生の大波乱」は周がフランスから中国に書き送ったもので、『益世報』（1921年５月９－17、19日）に掲載された。渦中にいた人物としては比較的冷静に事態の推移を叙述している。この文章を書いたとき、周は着仏後６ヵ月に満たない。まだコミュニズムの影響を受けていなかったので、このような叙述になったのではないだろうか。

ちなみにこの文章には、周自身による続編「留仏勤工倹学生の最後の運命」があり、ともに上記の『赴法勤工倹学運動史料』第１冊に収録されている。なおこれらの文章は『周恩来同志旅欧文集』（文物出版社、1979年、北京）にも収録されていることを付言しておく。

【本文】

留仏勤工倹学の問題に関して、国民はもう聞き慣れている。しかしその名前だけは知っているが、その実際を知らない者がほとんどだ。もちろんその原因は、国内に引き込んでいて国外の真相を知ることのできない者が半ばだからであるが、もっと肝要なのは、国外からの報告は全部当事者の主観的な叙述であるため、内情のすべてを知りたい者を五里霧中に落し込んだことである。記者はヨーロッパに来てまだ日が浅いが、ちょうど留仏勤工倹学の状況が大きく変化した時期に遭遇した。波乱が突然起こり、ここ数年間の軽率さが原因で今日では生きることも死ぬこともできない状況に陥り、重傷を負って、再起困難なのが今日の教育界の新現象であり、わたしはこれを記さずにはいられない。また記者自身が異郷で勉強して

いることから、客観的な立場をとれ、真実に基づいて書くことができる。部分的な見方に一切捉われることなく、渦中の人と比べて偏見が少ないのである。今日の波乱とは、一体どんなものだろうか。簡単に言えば、留仏勤工倹学生たちは、生きる道は険しく勤工の力もない。倹学はまだまだ実現していないのに、もうすでに日が暮れた状態に陥っているかのように見える。もしその根源に遡り真相を求め、将来を判断しようとすれば、おそらく長篇とならざるを得ないが、真相を知りたいと思っている国内の有志たちのために、煩瑣であるが項目を分けて書いておく。

(1) 勤工倹学の始まり

「勤工倹学」という四文字がこの世に現われてから、およそ六年の歳月が経った。それを聞いた国民は、誰もが勤工すれば倹学できると思ったり、あるいは国内の五・四運動後に現われた工読互助団と同一視している。しかし本当の内容を探るなら、その始まりから研究すべきであろう。在仏留学生のなかには、「勤工倹学」するより先に「倹学」を実行した者がいる。これは最も切り詰めた費用で勉強の目的を達成するというもので、成否のいかんは各自の所得と仕送り、あるいはその国の生活レベルと倹学生本人の努力の能力による。内容が甚だ複雑なので、別稿に書くことにして、ここでは触れないことにしよう。「倹学」は民国紀元後に始まった。当時、李石曽が豆腐工場を設立したことで、多くの中国人労働者を受け入れることができるようになり、そして仕事の合間に彼らに一般知識を教えれば、国内の労働者よりも進歩できるという考えに基づいて、李氏は自分の同郷人をフランスに招いて働かせると主張した。当時、第一次世界大戦がすでに勃発していて、フランスは大量の中国人労働者を必要とした。李氏の募った人たちは同郷人が非常に多く、その大半が農工出身だった。李氏からみれば、国内で一生懸命働いても、腹を空かさない程度の収入しか貰えず、全く楽しみのない生活を送るしかない。同じ働くなら外国に出て働く方が次のような八つの利点がある。(1)出国後、一般知識を身につけることができ、固有の狭い視野を広げ、閉鎖的な心理を開くことができる。(2)工場に入って働けば、徐々に機械を使いこなし、科学的な技能を身につけることができる。(3)フランスの労働者と触れ合うことから、彼らの集団生活の組織能力を学ぶことができる。(4)戦争中のヨーロッパで働き、戦争の悲惨さを目にして、兵は凶悪、戦争は危険であるという心理を起こさせ、強暴なものに対して、団結して戦うことが必要だと悟らせることができる。(5)労働で得た収入で家に仕送りすることができる。(6)毎日の必須の生活費以外に貯金もできる。(7)この機会を利用して、彼らに相当な教育を与えることができる。(8)外国語能力が必要とされることによって、彼らの知識欲を起こし次第に勉強するようになる。一方、出稼ぎ労働者たちの考えでは、彼らの浅はかな心理によれば、外国に行くのは国内にいるより良いし、家族が生活費用を心配することなく、自身も衣食の満足が得ら

れる。そして常に外国人とつき合うことから、わずかな外国語でも習得すれば、錦を飾って郷里へ帰れると思っているのである。このような理由で、李氏の高い要求にもかかわらず、応募者は少なくなかった。そのなかに李氏が期待していたような人こそ少なかったものの、二、三の条件には合致する人が多数だった。さらに李氏の同郷人の多くは素朴で、一、二年働くと、大概少しは貯蓄ができ、徐々に常識を身につけ、ふるまいが文明的になり、出国当初の少しでも動けば人の注目を引くようなことは二度となくなった。そして大概の者は、外国語を書くことこそできないものの、応対で恥をかくような態度はもはやなかった。彼らのような田舎者ですら、ヨーロッパに一、二年もいれば、こんなすばらしい成績を挙げれるのなら、彼らを青年学生に換えても、どうしてできないことがあろうか。おそらく得られる効果はその百倍であろう。

(2) 創始者の意図

李氏がこのような考えを持っていたから、李氏の中国人労働者教育を手伝っている人たちは皆、労働者でさえこんな成果を挙げられるなら、「勤工倹学」もどうしてできないことがあろうかと思うようになった。やがてこれに呼応する人が多くなり、勤工倹学会が民国四年に設立されて、今日までわずか六年にすぎないが、フランスに渡った勤工生の数はすでに著しい。創立した当初、国内の青年たちはあまり興味を示さなかった。そのうえ戦争の最中であったことから、誰が潜水艇の危険を冒してまで冒険を試みるだろうか。またたとえそういう決心をした人がいたとしても、家族に止められ、結局フランスに渡った人は多くなかった。しかし行くことのできた人は皆良い結果を収めた。その理由は、フランス人が労働者を強く求めた一方で、行く人が少なかったことで、責任者の措置も宜しきを得たことによる。やがて大戦が終わり、国内の青年は新思想の影響を受け、知識を求める心が旺盛で、「工読」という言葉を聞き慣れ見慣れた。また「労働は神聖である」という思想に鼓舞されて、奮起して国外に行って勤工倹学する者が急増した。中仏教育会の名簿によると、その数はなんと二千人に及んでいる。この二千人のなかで倹学する者は少数であり、勤工倹学する者が大多数である。しかし倹学する者のなかで「学」をやめて「工」に変える者もあるが、ここでは一括して「勤工倹学生」と呼ぶ。これらフランスに来た者は、当時の日に日に高まっていた「勤工倹学」の宣伝に呼応したものである。しかし創始者たちの宣伝はいかなるものだっただろうか。私が前節で中国人労働者の来仏した理由を面倒を厭うことなく書いたのは、まさに諸先生が呼び掛けた「勤工倹学」の前置きをなすものである。諸先生の考えでは、愚かな中国人労働者でさえ、全然目的がなくても、短い間に貯蓄ができ、わずかとはいえフランス語を学び、また見聞を広め、そして帰国後その見聞を郷里で広めることができる。フランスで身につけたものを実用し、フランスで学んだ知識で社会に貢献するという利点があるなら、

すでに「社会を改造する」という大志を抱えている青年たちにとって、「工」を副にし「学」を主とすることは、何ら実行できないことではない。諸先生の計画では、中国人労働者の出国でさえ八つの利点があるとされた。それを青年に置き換えれば、第一項では、学生たちはすでに一般の常識を備えており、視野も労働者のように狭くなく、心理も彼らのように閉鎖的ではない。第二項では、学生たちはすでに科学的知識を持っている。第三項においては、学生たちはすでに学校で集団生活の組織的訓練を受けたことがある。第四項においては、学生たちは戦争の悲惨さを知らないことはない。第五項においては、学生たちはまだ若いので、家族で仕送りを希望する者はおらず、その収入で貯蓄を増やすことができる。第六項では、学生たちで貯蓄の利点を知らない者はなく、かつ中国人労働者に比べて趣味も少ない。第七項については、学生たちはすでに相当な教育を受けている。第八項においては、学生たちの外国語の知識は労働者に比べて十分であり、かつそもそも勉学するために来た者である。以上の八つのすべての点において、中国人労働者が欲しがっているものは学生たちにとってすでに備わっており、これを拡充し大きくすれば、半分の労力で二倍の成果をあげることができる。これ以外にも、世界の新潮流である労働の真髄と学術の必要性や、自身のためだけではなく、人を育てることの必要性を加えることができる。このような重大な使命を担えるのが学生であり、また学生のみがこの重大な使命を実現させることができる。これが「勤工」という前半の言葉の意義である。後半の「倹学」の言葉に関しては、諸先生の計算によると、一人あたりの日給が平均15フラン、日曜日を除いて毎月の収入は390から400フランになる。普通、工場が労働者に寮を提供しているため、毎月の食費は、一人当たり、自炊者は150フランで十分で、その他の雑費100フラン、これで毎月150フランが余る。一年にすると、1800フランの貯蓄ができる。これは最低賃金の場合で、熟練工なら日給20フランを得ることができる。学校に行きたければ中等実習学校の場合、食住込みで年間1200フラン、高等専門学校では年間千数百フランで、食住込みのものがあるので、四、五年または二、三年勤工すれば、いずれ学校に入って勉強もできる。フランスの専門学校に関しては、長いものが三年、短いものなら二年で卒業できる。賢くて節約のできる人なら、卒業まで勉学ができる。さらに夏休みが三ヵ月もあるので、また労働して生活ができる。もし学校に入りたいとか、学校を探しているなら、紹介したり案内したりする人もいる。学校を卒業すれば、勤工も倹学もできたことになる。勉強期間は短いけれども、専門的技能を身につけて帰国すれば、実業の振興に役立てる。そうなれば衣食全部を人に頼ることをやめて、人を助けることができるようになる。さらに長い間欧州の空気を吸ったことで、自然に頭脳も一新して、団体生活の組織能力をすべて備えれば、社会改造に大いに役立つ。出国から帰国まで、十年を越えることはない。人は十年生きて、十年の教訓を得ると言われているが、わずかに半分の時間で両者を身につけることができる。「人材を育てるには百年かかる」という諺を考えれば、これはとて

もすばらしいことである。諸先生の創始当初の善良で隙のない考えからすれば、先生たちが思った通りの成功がすべて期待できるはずである。事実がこんなに違ったことになるとは、誰が予想できただろう。

(3) 勤工倹学生自らの認識はいかなるものだったのか？

創始者諸先生の熱心な提唱および尽力と奔走、若い学生たちが模範視した中国人労働者、勤工という目的を持って来たこと。こうした事実にもかかわらず、その結果は反対になってしまった。その誤りは誰に帰するのであろう？　それを学生たちに帰するとするなら、かれらの認識は本来この程度のものなのだから、今日の結果は必然だった。それでは誰の責任だったのだろう？　やはり熱心な創始者諸先生たちの責任だ。確かに諸先生の創始の意志はたいへん良かった。しかし最善とはいえない。確かに諸先生の計画は綿密なものだった。しかし隙がなかったとは言えない。李石曽が同郷人の中国人労働者で成果を挙げたのに、学生たちになったら、反対の結果になったのはなぜだろうか？　中国人労働者が李石曽の同郷人だったからこそ貯蓄ができ、フランス語を学び、知識を広め、勤勉に働き、帰国後は背広を身にまとい、まるで今をときめく人に変身した。そのうえ冷静でものわかりもよい、実に郷里の人たちの期待した通りだ。別の省で、ある会社とフランス陸軍部との契約によって、労働者として来仏した人たちのケースをみると、有名人が宣伝してくれたにもかかわらず、いまだに野蛮性を根絶できず財産めあての殺人をする人もしばしばいるのはなぜだろうか。しかしこの種の人はそのうちの少数に過ぎない。彼らの希望は労働の一部分の報酬で国内の家族に少しでも仕送りができ、国外では見聞を広め、家族を養うことである。国内でろくに労働もせず、郷里に害を及ぼすチンピラになるより、利点が多いのは言うまでもない。若い学生なら、希望は、ただ働くだけでなく勤勉に働き、また働くだけでなく労働の後で勉学することである。中国人労働者では、働けるのはすでに合格、勤勉で貯蓄もできれば上出来、少しでも知識を求める者はさらに稀である。学生なら、勤工と倹学兼備している者だけが合格であり、多く貯蓄し入学もできれば上出来、もっと知識を求める者はさらに稀である。中国人労働者に対する要求はさほど厳しくないにもかかわらず、李石曽氏の郷里の人は合格している。なぜか？　それは李氏が人選に慎重だったからである。勤工倹学の場合、資格こそ難しかったが、たくさんの人が呼応して、何年もしないうちに、来る者は二千人もいて多かったが、応募者自身の認識がいかなるものであったかは、その始まりまで遡る必要がある。勤工倹学についていうと、出国の前は勤工倹学の実況に対して何も知らないし、働く習慣も全くなかった。なぜなら国内の仕事は手仕事で、個人が自由にする仕事であり、この種の仕事は、技能を習ったことのない者でも隣で見ていればすぐ覚えられる。だから懶惰な人は油を売ることができる。このような考えを抱いて欧州の大工場に来たとしても、仕事の魅力を感じ得

ないうえに、サボることも容易ではない。だから労働を面倒なこととみるようになる。しかしこの程度なら国内で一年間実習すれば、解決できる。勤工して貯蓄もできるという良い習慣は国民に欠けているため、李石曽の郷里の人にはできたことでも、他省の中国人労働者になるともう効果がない。まして学生になればもっと難しい。勤工ができ貯蓄もでき、そのうえさらに倹学ができるというのは歴史上あまりないことである。普通の若い学生が皆そういう可能性を持っているとの考えは、中国の民族性をあまりにも無視しすぎている。いわんや習慣の養成は訓練にあり、中国の家庭、学校、社会において、普通の青年が働きながら勉学する習慣を養成できるとは、私には信じがたい。勤工倹学の能力がまだないことを自ら明らかに認識していれば、冒険を試みて、体を鍛え技術を身につけて、フランス語を少し覚えることよって、勇猛果敢に戦って困難を克服し、新しくかつ流行の「工読主義」を実現できる。しかし大多数をみれば、彼らはほとんど何も認識しておらず、教育の良くないことよりも、環境に対する不満の方が大きいので、一時の感情に動かされ、目下の社会の流れに支配され、「勤工倹学」という名だけに憧れて、やみくもに出国した。団体の指導を受け、群衆の動きに付和雷同し、自分の考えで賛成したのではないため、勇気があるのは結構なことだが、自らの力を知らずに無謀に出国したので、失敗しないはずがあろうか。これだけではない。出国して労働する中国人労働者に与えた諸先生の意図は良かったにしても、慎重に人を選んでいないため、提唱を宣伝に変え、自動を衝動に変え、やみくもに来仏させた責任は、諸先生たちが最善を尽くさなかったことに帰せざるを得ない。

(4) 勤工倹学と中仏教育会の関係

諸先生が「勤工倹学」を提唱して、いわゆる「勤工倹学会」のような団体も出現した。幸い当時は出国人数が多くなく、別に目立つような出来事もなかった。やがて中仏両国の具眼の士が中仏の文化交流の必要を感じ、中仏教育会を設立した。職員は両国の有志で構成され、フランスと中国両方に事務所があり、しかも専属の事務処理の人がいた。それと同時に留仏して勤工倹学する人も徐々に増え、出国、職探し等全部勤工倹学会に頼ることになった。しかし勤工倹学会は、もともと名ばかりで、維持しているのは創始者の諸先生たちで、実際の会員はみな留仏勤工生だった。かれらは自分のことで精一杯なのに、国内の人のために計画することなどどうしてできようか。したがってすべての事務は諸先生に頼らざるをえない。諸先生は熱心な人たちで、始めたら最後までやり遂げる。国内でフランス語予備校を設立し、中仏教育会に附属させ、実習工場も設立し、技能の練習を指導した。諸先生自身も忙しいので、勤工倹学生の出国の事務を国内の中仏教育会の職員に委ねて、国外の事務は国外の中仏教育会の職員に任せたことが、勤工倹学会が中仏教育会に附属した由来である。その後出国して勤工倹学する人は、すべて必ずまず中仏教育会に入会し、同時に勤工倹学会会員にもな

って、出国後の手紙のやりとりもパリの中仏教育会を通じて転送するようになり、学生も社会も中仏教育会と勤工倹学会を同一組織とみなすようになった。パリの教育会はフランス政府、工場、学校との交渉をしやすくするために学生事務部を設立し、入学、職探し、会計、手紙の転送等の事務を行ったので、すべての人が勤工倹学を中仏教育会の事業内容の一つだと思い込んだ。さらに国内にいる者は、中仏教育会の他の事業のことも知らず、中仏教育会を勤工倹学事業専門の組織とみた。中仏教育会と勤工倹学会の関係は以上の如くである。国内の勤工倹学を志している青年学生にとっては、国内での打ち合せ、出国時の案内、出国後の接待およびその後の生活に関するすべてが、中仏教育会と関わっているため、極めて深い印象を持つのも当然であろう。だから今になって突然、勤工倹学会が中仏教育会との関係を断ち切ると通告を出したのに対して、内実を知る者でなければ、大きな反感を持つのは当然である。諸先生の勤工倹学の設立と準備は周到ではあったが、やはり過ちは、かれらが最善の周到を尽くさなかったことに帰せざるを得ないのである。

(5)　中仏教育会職員の方針

諸先生の好意的な意図と周到な設立と準備に対して、私のような局外者はもちろんのこと、渦中の人でも、善を尽くしたが最善を尽くしていないというだけで、不善不備といって責める気にはならない。しかし諸先生が委ねた人と対応の方法を考えると、少しも弁護することはできず、その措置は当を失していたと言わざるをえない。分類して言えば、出国時の審査が厳しくなかったため、国内の職員は責任を免れることができない。勤工生の資格は、フランス語力、強壮な体、熟練した技術の三つを兼備したうえ、出国時に三千ないし五千フランを所持すると定めている。すべての出国者に同じようにこれを要求すれば、勤工生の現状は今日のようにひどく崩壊しなかったはずである。今その内容を考えると、フランス語を一言も習わずにフランスへ来た者もいれば、体が虚弱で働けない者もフランスへ来た。甚だしいのは15、６才の子供でフランスに来て勤工する者もいて、これはシャトー・ティエリー予備校にいる四川省の某君で証明できる。また何の技能も習得していない者も来仏した。甚だしいのはわずかに国内の小学校を卒業しただけ、あるいはそれさえしておらず、科学的知識は皆無で、フランスに来て勤工する者もいた。フラン所持を要求したのは失業時の保険に当てるもので、普通の勤工生で金を持って来仏した人は、大概三千フランを所持しているが、なかには一銭も持たずに来る者もいた。その原因を究明すると、他人の小切手でごまかしたか、来仏後に中仏教育会に難しい要求をしないという約束で検査をパスしたという。前者は勤工生本人の問題で、職員と無関係と言えるが、後者は一体どういうことだろうか。一歩譲って、金のことは何とかなるとしても、前述の第三項の資格をちゃんと具備していれば、まだ労働ができ、勤工倹学問題も解決できるだろう。しかし第三項をあやふやにするのは、断然許す

わけにはいかない。金を所持して来仏した学生は、将来の保険のための資金にせず、仕事内容がきついと聞いてまずは学校に入り、仕事はしなかった。金がなくなると、悪い習慣も身につき、来仏当初の意気込みはまったく消えて、再び働きたくても不可能となり、借金で生活を維持することになる。金はどこから出るのだろう。中仏教育会がいろんな所から借りてきたものである。一カ月、二カ月、半年では足らず、一年がやってくる。最初はまだ、悪いと思いながら仕事を嫌ってしないが、やがて同種の人が増え、さらに働くのは余計なことと思うようになり、ただで毎月四百フランの生活費を貰い、勉学の虚名だけ維持する。これは伝染病のようにすぐに蔓延して、仕事を持つ人までが仕事のきついのを嫌がり、仕事探しが難しいなどの言い訳で生活費を貰いにくる。彼らはフランス語を習っておらず、体も虚弱で、技能も身についていないので、入学しているという口実しかない。このような悪例を作り出したのは職員であり、その責任からどうして免れようか。しかも同じ勤工生でも、一方では有力な人の進言や横柄な人の脅しで、いつでも生活費を与え、もう一方では勧告したり、経費がないと告げたり、仕事をするように勧めたりしている。労働が本来やるべきことなのに不平を鳴らし、仕事をしても心の中では納得していない。このように措置が適正ではなかったことについて、職員はその責任を免れがたい。したがって諸先生の勤工倹学生の提唱は正しかった。出国を手助けし、勤工するように勧め、倹学の道に導き、困った時の助けあいなど、十分な準備をしたと言える。だが委ねた人が適格ではなかったので、人に隙を与えた点が不備なところである。

(6) 勤工倹学生自身の問題

以上で記者は、勤工倹学を提唱した諸先生の意図は最善を尽しておらず、方法も最良を尽していないため、今日の混乱に至ったことを詳しく述べた。しかし勤工倹学生自身の問題も複雑多岐であり、以下でいくらか述べておきたい。今や青年学生たちは、国内で「工読」の影響を受け、奮然として遥々欧州に渡ったが、その甘さについてはすでに前述した。衝動的な一面があるため、調子がいい時は周りの声を聞き入れず、前進することしか頭にない。聞き入れないどころか、人を凌ぐような気概にたいして、誰が意見を言えるだろうか。だからフランス語を習得しておらず、本来なら出国の資格もないのに、あまりにも意気盛んなので、教育会の職員も阻止できない。そして技能は未習で、体が強くなく、甚だしい場合は、年齢が幼くて出国ができなくても、その無謀な勢いのために教育会の職員はあえて阻止できない。フランの所持金の検査についても、その猛烈な勢いで曖昧にパスしてしまう。この種の事実は上海から出国する際、少なからず見かけた。しかしこのような専横な人はまだ少数であり、温順な人が多数を占める。だがこの多数の人たちのなかで、資格が規定に合わないのに出国できた者もいた。それができたのは、強力な人に頼むのでなければ旨くごまかしたのだが、

表面的な事実は防止しやすく制しやすいが、密かな悪事はとりわけ予測できないのである。これら両種の人は、勢いがあるうえに、一方は専横を主とし、他方は陰謀を主として、毎回出国して、フランスに送られる者は百余人を下らない。フランスまでの三十余日の船で共同生活をするおかげで、温順な人さえ影響されるのだから、普通の人は言うまでもない。したがってフランスに行く学生の船が上海を離れ、出国の話になれば、上海中仏教育会の職員の悪口を言わない者はいなかった。フランスに到着した後、本来なら職員に仕事を紹介して貰い、勤工倹学の第一歩を踏み出すべきだが、実際に工場に入る者は十分の四、五に過ぎない。残りの人はほとんど先に学校を探して落ち着き、しかもパリに入るのを第一目的とする。パリは賑やかな大都会、無駄な支出も多い。まだ先が長いのだから、フランスの首都に来るチャンスはいくらでもあるのに、ここで早くパリに行きたいと争う必要が果たしてあるのだろうか。学生の心理から言えば、自ら頑張るという精神だけで人の指図を受ける気持ちは毛頭なく、自由な意志を実現するだけである。圧迫のひどい国内からやっと自由な国に来たのだから、どうして束縛を受けることができようか。したがって中仏教育会の職員の勧告を受け入れるのは少数であり、ほとんどはパリに入り、いわゆる「優れた国の風光を見る者」として、フランス人にまたもや一団の中国人留学生がやって来たのを告げるのである。既に工場や学校に入った者の場合、多くの学生が技能に熟練していないため、工場で労働者から見習いに格下げされる人や一ランク減給された人もいる。さらに勉強ができず、いっそのこと学校を辞退した人もいた。自身の体が虚弱で、厳しい仕事に耐えられず、途中でやめる者もいる。給料が少ないので、見習いは制限も多いという口実で辞退する人もいた。このような現象はまだ仕事をやり始めた時の現象であり、百人のうち仕事をするのは四、五十人で、わずか半分にすぎない。やがて労働が長くなるにつれ、勤工倹学のためにまず貯蓄し、つぎに勉強するということになる。この二つの両立は、言うは易く、行うのは困難なのである。節約できる者でも当初は給料が多くないし、給料が多くなって毎日蓄えても、一週間、一年間と続けるのは実に忍耐がなければできないことで、そのような長所がなければ、流水のように消えてしまう。また一年の内に、誰が働き続けてやめないと保証できよう。誰が病気にかからないと保証できよう。誰が友人に金を貸さないと保証できよう。この内一つでもあれば、たちまち貯蓄がなくなってしまうのである。勉強についていえば、毎日八時間以上の労働を若い学生が国内でかつてしたことがあるだろうか。いったん仕事につけば、労働の後で二、三時間勉強することは、体力は強くて精神が卓越していなければできないことである。貯蓄し勉強するというのが不可能なこととなれば、「勤工倹学」の後半の「倹学」は実現できないのである。希望が薄いうえ安楽に慣れて、労苦の多い仕事に疲れ果てるのだから、百折不磨の人でなければ、誰が堪えることができよう。したがって働く人がほとんどいなくなり、残りのわずかの人たちが真の勤工倹学者といえる。しかしはたして「倹学」を実現できるか

という点については、現時点で有力な論証がない。つまり一生懸命働き、個人的な利害をかまわず、がむしゃらに頑張り、将来の勤工倹学の完全実現を求め、人類のために奮闘し、その栄光を増やした人は、実に少ないのである。

(7) 中仏教育会の経済的破産

パリの中仏教育会が単独で学生を招待し、学校と仕事を紹介し、生活費も負担することになれば、負担の重さは想像できるだろう。経済的現状からいうと、中仏教育会には利息を生む基金もないのに、一体どこからこんな大金を集めて、学生救済にまわせるのだろうか？二、三年も維持することができたのは、創始者諸先生が各方面から募金して困窮を救うのに頼ったからである。フランスに来る倹学生数も少なくないから、倹学生が中仏教育会に預かってもらった金の中から、急用の人に貸し、残った部分で資金回転する。このような水が来たら土で止めるやり方で、長持ちできるはずがない。たとえ勤工倹学生が勝手に脅迫し、群がって補助を求めるようなことがなかったとしても、その運命は長くないであろう。しかも生活維持費は日増しに増える一方である。中仏教育会の機関は勤工倹学会を運営する所ではなく、その重大な使命は中仏両国の文化交流にあり、今緊急に必要なのは急いで自身の問題を解決することで、他の仕事を顧みる余裕はない。もし今の情況から抜け出せないなら、中仏教育会の運命と仕事は、勤工倹学の失敗によって、中途半端に終わってしまう恐れがある。これはもちろん有意の人が取らないところである。このように教育会が分かれ道で徘徊している時に、蔡孑民がちょうど来欧した。蔡は中仏教育会の会長であり当然何もしない訳にはいかない。したがって晴天の霹靂の如く、今年一月十二日の通告が発表された。その内容はつぎの通りである。

「私、元培（蔡孑民）がフランスに到着してから、在仏勤工倹学生および学生部のスタッフが、相次ぎ私に各方面における困難な情況を訴え、解決方法を求めている。私の観察によれば、学生事務部の組織のよくないのが半分の原因である。そして中仏教育会、倹学会、勤工倹学会の三者は、その性質を弁別せず、いっしょくたになっていることによって、誤解を招いたのが後の半分の原因である。今、すべての問題を解決したければ、まずこの三つの会の性質を区別しなければならない。この三つの会の歴史について考えれば、倹学会が最も早く民国元年に設立され、その趣旨は最少の費用で留学の目的を実現することである。勤工倹学会は民国四年六月に設立され、「勤勉に働き、苦学する」ことを目的としている。この二つの会が設立されて以来、来仏する人数は日増しに増加している。同時にフランス側も中仏両国の文化交流の必要性に気づき、このような目的を達成するために、特別な組織を設立し、共同で運営しなければならないので、中仏教育会という組織が出現した。この中仏教育会は、

両国の文化事業における最高の組織であり、倹学会と勤工倹学会はせいぜいその事業内容の一つにすぎないのである。今はいっしょくたになっており、勤工倹学の業務を中仏教育会全体の事業とし、勤工倹学の業務処理に当たってうまく行かなかったことの罪を、すべて中仏教育会に転嫁している。このような誤解は、中仏教育会を勤工倹学の代名詞と考えたせいであり、これは実情とは大きく違っている。この誤解を解消するには、方法はただ一つ、倹学会、勤工倹学会をそれぞれ中仏教育会から分離させ、この二つの会が自ら運営し、中仏教育会は横ですべてを助けるようにすることである。その組織と方法に関しては、中仏教育会が臨時に替わって立案する。両会が成立した後、種々の組織および規則を完全に両会の学生自らで決めた後は、この臨時措置は自動的に無効となる。このような解決によって以前のような誤解を免れることができる。しかも学生たちが本国の事情を知悉していることから、両会の学生自身に事務所運営を委ねることによって、一切の措置は今の学生事務部より優れるはずである。また来仏した学生諸君の多数が自己管理の能力と新生活を求める精神の持ち主であるから、このような方法は学生諸君の心理と一致している。暫定方法および説明は以下の通りである。幸いにして速やかに実行されれば、私は大変嬉しい。

民国十年一月十二日

中仏教育会会長蔡元培」

この通告の他に、中仏教育会が代わって立案した倹学会と勤工倹学会の運営規則がたくさんあり、その梗概は学生たちに自主運営をさせ、中仏教育会はそのかたわらで助けるというものである。そのなかで最も重要なのは、学生たちと経済関係を断つことであるので、すぐに一月十六日の二次通告があった。

「私は前に学生事務部運営のまずさを速やかに改善するため、本月十二日に公表した通告でこの意思を表明し、学生諸君が速やかに自ら組織を作り、倹学会と勤工倹学会の諸業務をこなせることを期待した。学生側は奮闘して新計画を作り、以前の過ちを補うべきである。本教育会では、一年前から学生たちに貸した金の赤字が極めて大きく、もともと基金がないうえに、収入もなく、借り入れる方法もなくなった。にもかかわらず貸し出しを求める学生が日増しに増加し、今はどん底に陥って、これ以上続けることが難しくなったので、誠意を持って学生に通告するしかなかった。それによれば中仏教育会は倹学生および勤工倹学生に対し、一切の経済的責任はなく、精神面での援助の責任のみを負っている。学生諸君、本教育会の資金援助が中途半端であると誤解しないで欲しい。本会が恒常的な収入が無いことを知ってもらいたい。現在のような増える一方の援助にどうして応じることができようか。本会はやむを得ず以下の暫定法を作らざるをえなかった。学生諸君はこの苦衷を理解して、感

情的になって本会を非難しないで欲しい。私は教育会を代表し、経済関係を除けば、相変わらず全力を尽して在仏学生諸君を助けると誠意をもって宣言する。以上のことを了解していただければ幸いである。

民国十年一月十六日

中仏教育会会長蔡元培」

経済関係を断つ方法は、「中仏教育会が学生との経済関係を断つ方法に関しての正式通告」に記されている。

「(甲) 倹学生に関して。(1)倹学生で前に本会が金を預かった者は、一律に今年二月十日から三月十五日までの間に、学生自ら学生事務部に来て清算すること (親書の手紙でも可)。本会はこれ以上保管する責任を負わない。清算期日と手続きに関しては、学生事務部会計係が別途通知して処理する。従来本会が預かった金で、学費の支払いを本会に代行して貰った者は、一律に今年二月末を期限とし、以後は学生各自の負担となる。(2)倹学生で本会が預かった金がなく、従来本会からの貸し付けで学費を支払って貰っていた者は、支払いは一律に今年の二月末を期限とする。以後は学生各自の負担となる。

(乙) 勤工倹学生に関して。(1)現在工場にいる者は、通告が公表された日から仕事をやめることがあっても、本会からの生活維持費は一切支給されない。(2)現在勤工倹学生で、在学していて本会に学費を支払って貰っている者は、支払いは一律に今年二月末を期限とする。以後は学生各自の負担となる。(3)学生事務部規則の十二条により、かつて生活維持費を一ヵ月ごとに借りた者には、もう一ヵ月分は貸与するが、それは二月末で終わり、以後いかなる理由でも一切支給しない。(4)上記の(1)から(3)の規定範囲以外の者で、本会に来て生活維持費を受給しようとする者に対しては、本会は一律に受理しない」。

二回にわたって通告を公表した後、留仏学生の間で大波乱がおきた。これは長江大河のように、千里の長さを流れ、波乱を引き起こすのは、山峡の途中で大きく突出した石が原因だともいえるが、もっと重要なのは、その源が山から発していて、激流の勢いに助けられたからである。読者が留仏勤工倹学の由来を知っていれば、今の大波乱は決して偶然でないことを知るはずである。

(8) 通告公表前後の情況

一月十二、十六両日に通告が出された理由とその遠因に関して、既に私は詳しく述べた。これからはその近因について探ってみたい。蔡元培が欧州に来て、最も重要な使命は中国と

欧州文化の接近をはかることであった。各国の教育会と接触し、中国・フランス、中国・ベルギーの二つの大学について計画があった。しかし蔡氏は中仏教育会会長として、勤工倹学を提唱した人であり、今日の留仏勤工倹学の問題をそのままにおくわけにはいかない。そのうえ蔡氏が今回来仏する前に、湖南省に講演に出かけ、湖南省出身の勤工倹学生のために募金し、フランスに持参して救済に当てる責任を負っていた。だから蔡氏がフランスに来る直前に、留仏学生界のほとんどが、蔡氏が到着した後に適切な解決策があると期待していた。これは勤工倹学生の一部分だけではなかった。勤工倹学生の困窮状態、中仏教育会職員の応対のまずさ、倹学生が国内から援助がないこと、借金の術がないこと。局外の人もこうした情況をみて前路が険しいと思い、何らかの解決策を得て正しい道に戻さねばならないと思った。留仏した人々は蔡元培に大いに期待を寄せたのである。しかし蔡氏はどのようにこの期待に答えただろう。蔡氏がパリに到着してまもなく、中仏教育会の職員たちが彼にその窮状を訴えたのは言うまでもない。勤工倹学生と各方面の人たちは、皆、蔡氏を訪ね、解決方法を示すよう求めた。蔡はその煩わしさに苦しみ、ついに一月上旬にパリ西郊の中仏教育会の会館に行き、皆と会った。皆から質問攻めとなった蔡は現状に暗いことから、あまり多く答えることができなかったので、その日の集会は要領を得ないまま解散した。こうして大きな期待を持った人は、要求が満たされなかったため、蔡まで非難し、蔡の方もそれに対してとても不満を持っていた。初めての会見は甚だ円満ではなかった。この時期に中仏教育会学校部某幹事は、職員の横柄と不平等な態度に不満を持っていたため、質問書を出して、職員のリーダーたちに異義を申し立てた。その内容は全部が正しいとは言えないが、しかし全く道理のない話でもない。例えば、会則が不適切なこと、リーダーたちが定められた会則を守らないこと、生活維持費の発給が不平等なこと、このような事実は現実に否認できないことである。この質問書の公表は、リーダーたちばかりに向けたものだけではなく、蔡にも暗示したものである。だから職員は沈黙して答えないというわけにはいかなかった。こうして弁明する者がいても、某幹事の指摘した事実は正確ではないが、やはり外部の者と違って自身が幹事であることから、内情を知らないことは断じてないと思われた。だから弁明しても、どうして皆の疑問を解けるだろうか。そのうえ勤工倹学生は、教育会からの生活維持費の発給が行き渡らなくなったから、職員に怨みを集中して、臆面もなく非難を浴びせた。そこでまもなく蔡元培の二回目の中仏教育会での会見が行なわれた。

蔡氏の考えからすれば、これは各方面の意見を聴取するにすぎなかった。しかしやって来た学生は、この際中仏教育会職員の不当を思う存分攻撃し、さらに中仏教育会に勤工倹学生の前途の問題を解決するように要求した。言い換えれば、蔡元培に勤工倹学生の前途の問題を解決するように要求した。蔡元培はここで初めて、勤工倹学生が職員の職務上の失敗を批判したのは枝葉の問題であり、勤工倹学の前途の問題の解決を求めるのが本題であることを

了解した。しかもこのような要求を出した勤工倹学生は、勤工のことにはほとんど触れず、生活維持費発給のことばかりに注意していた。たまたま労働に言及しても、フランスでは不景気が甚だしく拡大し、中国人労働者を拒否していることを口実にして、このような現象を解決し、学生の望みを満たすためには、各人の経済的事情を是非解決しなければならないと説いた。蔡は、中仏教育会に恒産がないのに、どこからこんな大金を集めて、学生の危機を救えるだろうか。したがって蔡元培の回答は、当然ながら質問者を満足させるものではなかった。勤工倹学生は、怒りの余り、人を許すことができず、もっと甚だしいのは、蔡氏に罵声を浴びせる者までいた。蔡はここで事の難しさを知り、整理すればするほどますます混乱してしまうことになった。そこでためらうことなく一月十二日と十六日の両回の通告を行なった。通告が公表される前に、教育会の職員たちは勤工倹学生が頻繁に来て質問をするため、ついに場所をかえて仕事をし、会館には行かなかった。学生たちは、蔡氏が学生たちに満足のいく解決ができないうえ、職員たちが会館に来ないことに怒り、その勢いもますますすさまじくなっていった。通告が公表されるに及んで、学生たちは、まるで春雷に打たれたように夢から目を覚ました。経済的な問題が目の前にせまり、数年来の勤工倹学という叫び声を、ここで初めて自分で解決するしかないと知った。しかし学生には、依頼性ができあがっており、能力も薄弱である。今度の教訓を経て、毅然として他の計画ができる者は、決して少ないとは言えないが、多数のものは依然として万が一の考えに期待して、政府に助けを求める。これはいわゆる「東を助ければ、西が倒れる」というようなもので、独立性がないともいえるが、しかし政府が彼らを甘やかしたともいえる。

蔡元培の一回目の通告は、倹学生と勤工倹学生が各自の組織を持つことを希望していたが、これは実に事実を知らない議論であった。思うに、今日の留仏学生はすでにその出国時のもともとの区別を失っており、相互に関連し接触しているので、甚だしい場合は、中仏教育会の職員から見れば、その区別は出国時にはあったが今は存在しない。国内から来た経済的に余裕のある学生は、始め出国する時こそ倹学生の船賃が安いことを狙って、倹学の名義で来たが、フランスに到着した後、金を教育会に預けると引き出すのが不便だという理由で、すぐに引き出したので、中仏教育会と経済的な関係は一度も持ったことがなかった。学校の紹介など、仮にかれらから何らかの要求があれば、中仏教育会の学校紹介部は、当然ながら、それを助けた。今は経済上の援助を打ち切るという通告があったので、彼らと無関係である。しかしいわゆる精神的な助け、すなわち学校の紹介などは、相変わらず中仏教育会の職員たちが優先的に行なっている。このような学生たちは、これまで中仏教育会に求めたことで失うものはないので、組織のことは、中国人の「余計なまねはしない」という考えから、当然ながら関わることを願わなかった。そのうえ中仏教育会のいわゆる手紙の転送所も、フランス在住学生の住所の変更が頻繁であることから、国内からの来信は皆これに頼るのが便利な

ので、今も手紙の転送は相変わらず以前と同じである。これら経済的に余裕のある倹学生が中仏教育会に求めていることについては、これまでと変わりがないので、倹学会による組織を余計な真似をしていると見ている。これら中仏教育会と経済的な関係を持たない学生の「自力の組織」に対する考えは以上のようなものだった。

つぎに中仏教育会と経済的関係を持たずに労働している学生について述べたい。この種の学生は最も刻苦自治のできる学生で、かれらの理想もまた「勤工倹学」という四文字に十分輝きを増すことができる。かれらは労働を神聖なものとみなし、勉強を本分とし、労働の合間に勉強することが彼らの日常生活であり、一度も中仏教育会に面倒をかけたことがなかった。そこで自分で組織するという蔡元培の通告を聞き、もともと自己管理と新生活の精神に富んだ人たちなので、当然通告を歓迎した。ただ労働時間が長くて疲れても、勉強に頑張っているので、とりわけ暇な時間がない。また工場が各地に分散しているので、集合するのは難しく、仕事をサボって時間を浪費するのはもっと忍びがたい。だから組織する気持ちはとても強くても、組織はやはり実現しにくく、その実現を助けて促進する人もいない。しかしなかには集団生活や刻苦して自ら持することに慣れていない者がおり、「組織」を非難するのは、たいてい集団が互助力を増強することを信じない者である。

現在、通告が出された後の情況を知りたければ、留仏勤工倹学生と倹学生の区別と傾向について、一言述べなければならない。留仏学生の数は、ここ二年来、数が二千まで急速に増えているが、それは一時的な隆盛といわざるを得ない、この二千人のなかで、官費生は最も少なく、しかも彼らは今回の件とはかかわりがないため、ここでは論じない。倹学生は勤工倹学生より若干少なく、自費で来た者はすべてこれに属する。彼らは最も切り詰めた費用で勉強の目的を達成するため、国内ですでに具体的な計画を立てて来たので問題が生じるわけがないように見える。しかしある種の現象は、その始まりは容易だが、流行してその気風が複雑になると面倒なことになる。倹学という名目はもともと中仏教育会に心配を残さないはずだった。しかし事情が変化して倹学生と偽って出国する者までいて、フランスに来てから勤工倹学生に分類された者もいれば、倹学でフランスに来た後、家庭環境の変化により、仕方なく勤工に転じた者もいる。また勤工倹学とは、仕事がない時に生活維持費が貰えるものだとみる者もいれば、仕事をやめて就学しても、教育会が代わって学費と食費を出してくれると考えて、勤工に転じた者もいる。そして国内からの送金が来ないため中仏教育会から借りて、在籍している学校の学費と食費を支払う者もいる。この種の倹学生のすべては、名は倹学生でも実は勤工生に等しい。しかし勤工生のなかでも、フランスに来てすぐに工場に入って労働を始め、終始、中仏教育会と経済的な関係を持たなかった者もいる。一時的に失業しても、生活維持費を普段の貯蓄に頼り、中仏教育会に面倒をかけなかった者もいる。また学校でフランス語を準備したり、工場に入って勉強したりして、生活維持費を貰ったが、技

能を習得しあるいはフランス語を若干覚えた後はすぐに工場に入り、二度と中仏教育会に面倒をかけなかった者もいる。これらの人々は、勤工倹学生と呼ばれても、中仏教育会の会則を順守したのだから、中仏教育会に面倒をかけた倹学生よりは優れている。したがって留仏学生の分類にあたって、ただ名目で判断するのは決して妥当なことではない。つまり彼らの行動から区別すべきである。私は、この文章のなかで勤工倹学生と呼んでいるが、実は「中仏教育会と経済的関係を持ったすべての学生」がこれに含まれている。しかし中仏教育会と経済関係がない学生など、官費生以外に聞いたことがない。ここで中仏教育会の通告が出された後でどんな影響が及んだか、まず「中仏教育会と経済的関係を持っていない学生」について論じてみよう。

教育会と経済的な関係が生じた者もまたいくつかの種類にわけることができる。(1)かつて教育会から貸付金あるいは生活維持費を受領し、今は工場で労働して、他の希望を持っていない者。(2)現在、教育会から貸付金あるいは生活維持費を受領しているが、工場で労働したい者。(3)現在は工場で労働しているが、その仕事に落ち着かず、生活維持費あるいは貸付金を受領して、学校で勉強することを希望している者。(4)現在は教育会から貸付金を受領して学校で勉強しており、その継続を希望している者。(5)現在、生活維持費を受領しており、それを継続するかまたは貸付金に改めて、学校で勉強することを希望している者。これは現象と希望の種類によって論じたもので、「自力組織」に対するかれらの見方については、現象によって分けることはできず、彼らの思想や考え方、観察と判断によって区別すべきである。ひとつの種類は、組織は確かに団体生活を促進し互助力を増やすために必要だとみる者である。組織は第二で、仕事を見つけ生活を安定させることが第一だと考えている人が、もうひとつの種類である。組織のことを自身に関わることだと思い、仕事探しは補助側の責任と考え、両者が同時進行すべきだと考える人が、さらにもうひとつの種類である。組織を本体とみなし、生活維持と生存の要求、すなわち求学権は各団体と政府の責任とするのものが、別の一種である。組織を不必要とみる者が、さらに別の種類である。ここであげたものは、すべて組織に賛成するか否かを根拠としているので、その考えの複雑さから同じ種類に分類することはもはや簡単なことではない。いわんや同じ賛成でも、その目標はまたそれぞれ異なり、同じ考えでも、賛成するか否かはそれぞれ異なる。たとえ組織に賛成し、同じ目標を持つとしても、地位が同じでないことから、目標達成の成否の問題が生じる。これに準じて考えれば、通告が出された後の影響は、「自力の組織」、「仕事探し」、「生活維持」、「生存権と求学権の要求」が、それぞれ別個の問題であることがわかる。前二項目は中仏教育会の職員が尽力しようとした計画である。第三項は、中仏教育会が、力が及ぶ範囲内で二月末まで維持することを願っている。第四項は、中仏教育会があえて立ち入りたくないところである。この四項目について、「仕事探し」と「生存権と求学権の要求」は対照的である。「生活維持」

は両者の間にある。「自力組織」は三者の上に置かれ、それがその存否によって区別される。これまでに中仏教育会と経済関係をもったことのある者は、千人を下らないはずである。それを何らかの種類に区分することはたいへん難しい。「生活維持」に賛成する者もいれば、「仕事探し」あるいは「生存権と求学権の要求」の方に絶対的に賛成する者もいる。さらに「生活維持」に賛成しながら、「仕事探し」あるいは「生存権と求学権の要求」にも賛成する者もいる。組織のことに賛成するか否かについては、前者は根拠とならない。しかし別の方法で分類する点では前者と同じである。どんなことでも、絶対的な考え方を持つ者は比較的に少数であるため、この千余人の人たちの各事項に対する態度も煮え切らない状態で、時には東、時には西という状態だった。どんな主張をしても、団結力が終始一貫することがないので、できあがった団体はそのことから大きな影響を受け、その気配りに「思う念力岩をも通す」という勢いがなかった。